

ペルー・ナウタでの暮らしを通じた、自然環境と相互関係を持つ生活様式の探究

環境情報学部3年 黒澤蓮南

1. 研究の背景と目的

本活動の目的は、ペルー・ナウタの暮らしを通じて、自然環境との相互関係を持った生活様式を探究することである。近代都市では、食糧生産の体系化やインフラの整備、廃棄システムの構築が進んでおり、災害などが起きない限り自然環境が自分たちの暮らしに直結する存在だという意識は薄いように思う。しかし今回研究を行ったペルー・ナウタでは、インフラの整備状況や経済的な理由などにより、地元住民たちは環境を活用し自然と呼応した柔軟な生活を営まざるを得ない。不便が多い半面、自然の中で変則的な状況を受容して営む生活には豊かさも感じられる。

そこで、本研究では発展途上の地方生活を「自然環境と呼応しながら日々作る暮らし」と捉え、都市生活＝「提供されたサービスで成り立つ均質な暮らし」では起き得ない生活行為を調査する。システム化された暮らしが当たり前になっている現代日本で、一度その暮らし方を俯瞰し、豊かな暮らしを考え直す機会としてこの研究を活かしていきたい。

2. 実施内容と成果

①現地住民の生業・生活行為の観察とその背景の調査

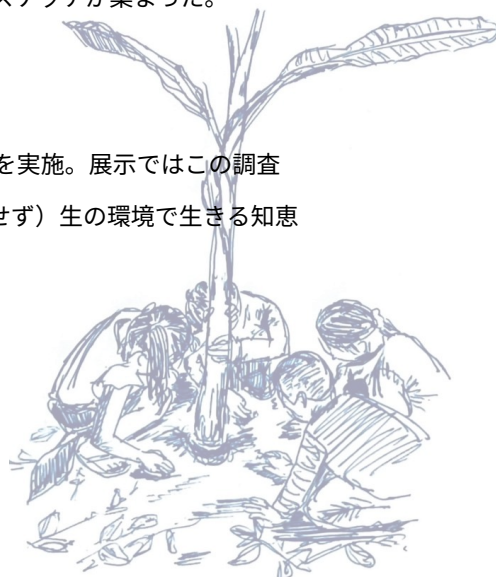
活動：ナウタのみでの調査実施を予定していたが、ご縁がありナウタから1時間ほどの場所にあるNueve de Octubre、Amazonasという2つの更に小さなコミュニティでも調査を実施することができた。各箇所で地元住民と時間を過ごし、彼らの所有する農地に連れて行ってもらって果物やトウモロコシ、米などの植え付け/手入れ/収穫を手伝ったり、釣りや鶏の屠殺、調理などを教えてもらったりした。また、彼らの家での過ごし方を観察し、自然環境との相互関係を持っているシーンを抽出し記録した。

成果：地元住民の生業を実際に体験することやその記録を通して、限られた道具やインフラ整備が行き届いていない状況の中で、彼らが自身の肉体と環境に在るものを最大限活用して暮らしていることが分かった。例えば、部分的に自給自足をしていたり、川から持って来た石や電信柱で鉈を研いだり、魚を調理する際に焦げ付いて皮が剥がれないようバナナの葉を敷いたり、小川で水浴びと洗濯を済ませたりするなど、自然環境と密接に関わる生活行為が見受けられた。合計で50を超える記録スケッチが集まった。

②展示会の実施

活動：11/23(土)ナウタの知人宅の前にて、調査を通して得た気づきをもとに展示会を実施。展示ではこの調査期間で最も強く感じた「（電気・ガス・上下水道・ごみ処理などのインフラに依存せず）生の環境で生きる知恵/力」を、5項目に分けてビジュアライズした。

1. 食のプロセス：食べ物を自給する力



2. 道具の汎用性：鉋一つであらゆる農仕事をこなす使い回し力
3. 身の回りにあるものの転用：ごみや自然環境にある材料などの使い回し力・想像力
4. 気候に合わせた暮らし方：生活時間や家の造りに見られる気候への適応力・対応力
5. シェアするコミュニティ：①～④を下支える労力や持ち物などを共有するコミュニティの関係性
6. 番外編 廃棄/排水：持続可能な処理方法が取られていない状態

成果：展示準備を通して、地元住民の生業は、都市生活を下支えするような大規模なシステムには依存していないという意味でレジリエンスに長けているという気づきを得た。災害などの予期せぬ事態が訪れたとしても、彼らのように生活基盤となるあらゆる資源を手近で調達する暮らし方をし、在るものから作ることに慣れているその能力があれば、柔軟に形を変えながらサバイブできるのではないかと思う。また展示方法においても、彼らから学んだ「在るものを活用する」メソッドを最大限再現し、印刷物以外にほとんどごみを出さない展示を作ることができた。

自分の学んできたことを再編集し、実践する機会になった反面、狙いとしていた地元住民の自身の生活の捉え方の聞き取りはあまりできなかった。原因は、展示趣旨が文章で記載されている導入や結論のパネルはほとんど読まれず、スケッチのビジュアルだけをさらうという見方が大半であったことにある。よりビジュアルに落とし込んで学びを伝えたり、彼らからの反応が起きやすい仕掛けを作る必要があったという点で、展示の作り方を反省している。



③日記・詩を用いた自分自身の変化の記録

活動：毎日、経験したことや興味深かったことなどを日記として書いていた。稀に詩も書いた。

成果：地元住民の生業に参加してきたが、そのほとんどが食べ物の生産に関わる仕事だった。日本の生活ではカット済のトレーに乗った肉やパッケージに詰められた米しか食べていなかったが、実際に自分の手でそれらの食べ物が食卓に届くまでのプロセスに触れていくことで、食べることは生を頂くことで、自分が生きていくことそのものであることを学んだ。自分の体が自然環境の循環に開かれていく喜びに近い感覚と共に、体の変化や自然の力に飲み込まれる恐怖などがあることも記録されている。

3. 今後の展望

しばらくはペルー、その他南米の国々に滞在し、アマゾン地域以外の自然環境の中ではどのような暮らしが営まれているかを学び続けていきたいと考えている。また帰国後は、日本でのシステム化された暮らしに今回の学びがどう活かせるのか、再度アウトプットを通して考えていく。

謝辞 研究にご支援をいただいた慶應SFC学会の皆様に、深く感謝申し上げます。